

NHK アカデミア 第21回 <特殊メイクアップアーティスト/現代美術家 カズ・ヒロ>



カズ・ヒロ：特殊メイクアップアーティスト/現代美術家。特殊メイクでハリウッドの頂点に立つ。2018年と2020年にアカデミー賞受賞。

こんばんは。カズ・ヒロです。アメリカで、特殊メイクと現代美術をやっています。今回、たくさんの方が参加してくださっていて、非常に感謝しています。質問のコーナーもありますので、よろしくお願いします。

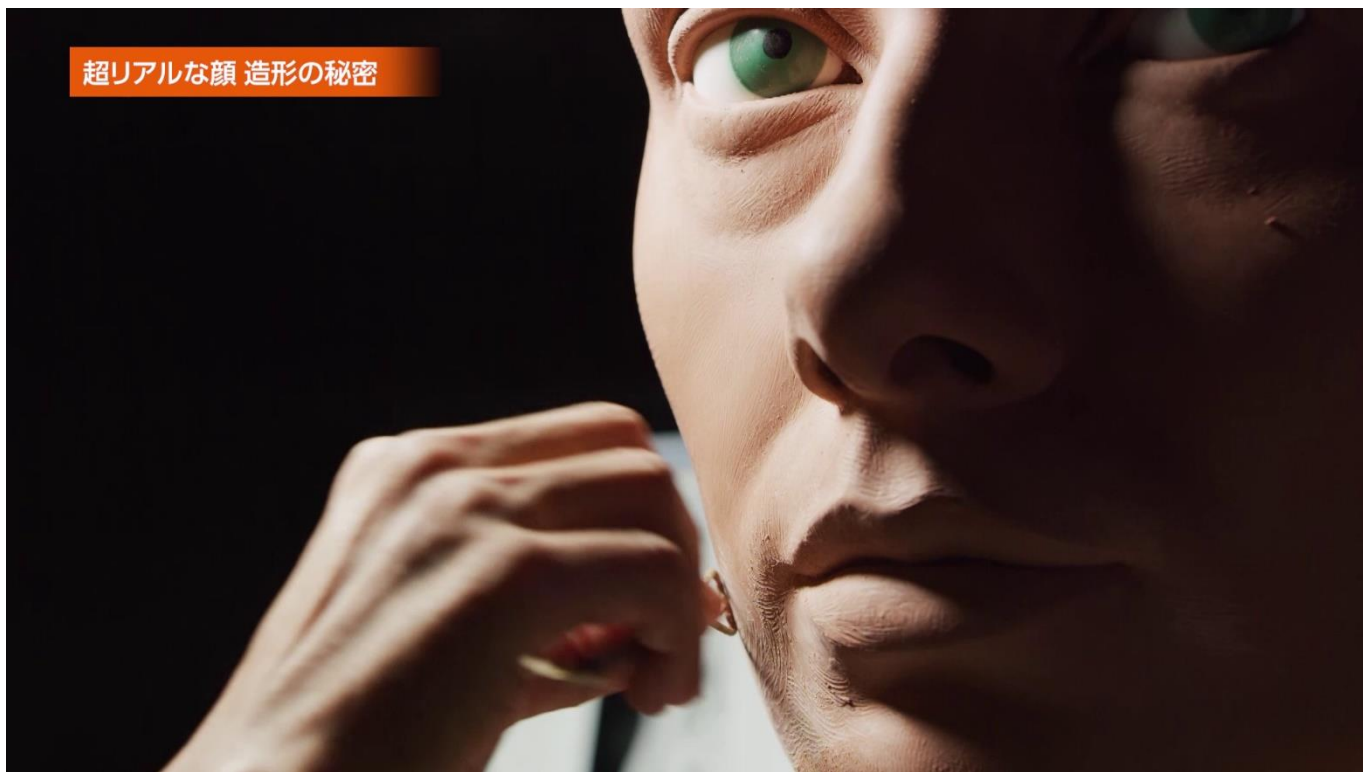
<超リアルな顔 造形の秘密>

超リアルな顔 造形の秘密

粘土彫刻

特殊メイクの制作方法をちょっと見てもらいます。最初に始めるのが粘土彫刻です。写真を見ながら、こういうふうに工房の中でやっています。部屋が暗いのは、照明を 1 個たいて、影が見えやすいようにするためです。いろんなところから照明が当たっていると、形ははっきりと見えませんから。

超リアルな顔 造形の秘密



これは、表面を成形しているところですね。

超リアルな顔 造形の秘密



これが道具です。毛穴などを作る道具や細かいシワを作る道具です。

超リアルな顔 造形の秘密



こういうふうの一つ一つ押しつけながら彫っていきます。

超リアルな顔 造形の秘密



※映像（開始点 3 分 10 秒）とあわせてご覧ください。

今、やっているのはベビーパウダーですね。プラスチックのシートを押したときに滑りやすくするために、細かいテクスチャーを上からつけています。

超リアルな顔 造形の秘密



※映像（開始点 3 分 40 秒）とあわせてご覧ください。

次にやるのが着色です。

シリコンのピグメントとシリコンのベースを混ぜて、それを筆やエアブラシを使って塗っていきます。

超リアルな顔 造形の秘密



最初は非常に薄い色ですね。そこにいろいろな色を重ねていきます。だから、最終的に 10 色くらいですかね。肌というのは表面の下からできているんですけど、それを作るのも難しいので、これを上に塗って、表皮の下の部分を表現して、重ねていって肌のように見せるというふうにします。

超リアルな顔 造形の秘密



エアブラシも 4 種類ぐらい使います。サイズの違ういろんなエアブラシですね。

超リアルな顔 造形の秘密



これは、赤を1色塗り終わったあとの見た目ですね。

僕自身、カメラに横にいられるのが非常に嫌なので、このときは、とりあえず赤だけ撮影してもらって、あとは一人でやらせてくれというふうに頼みました(笑)。

超リアルな顔 造形の秘密



辻村寿三郎

人形師・着物デザイナー

映画「スウィートホーム」(1989)

主演:宮本信子 製作総指揮:伊丹十三

着色が終わったあとに、目玉を作ります。目玉というのは非常に大事です。生き物が生きていくかどうかというのは、基本的にやっぱり目で判断できるので、人間が誰かを見たときに、目で判断することが多い。目の入ったリアルなものというのは、目が大事です。

上画像で使っているのはハギレ、着物の生地 of 裏地です。これは、映画「スウィートホーム」をやっているときに、辻村寿三郎さんという有名な生地 of デザイナーがデザインされていたんですが、その人が裏地を切ったあとにぱっと捨てたんですね。「これ、もらっていいですか?」と言ってもらったんです。実際に見てみたら、「これは血管に使える」ということで。それから35年間、これを使い続けています。非常に質 of 良い絹 of 糸です。



やはり目 of 位置 of というのが非常に大事で、人が見たときの“目線”ですね。どういふふう to 何を to 見ているか。たとえば、その人を見ていなくても、どこを見ているか、何を to 見ているかで、それが表現 of 一つ to なるんです。だから彫刻 of 目線 to 決めるときもそうですけれど、首 of 角度 of 全部 to あってないと生きて to こない、生命 to 出て to こないんです。それを to 考えながら、位置 to 決めたり、デザイン to 決めたりしています。

超リアルな顔 造形の秘密



目ができたら、次に植毛です。

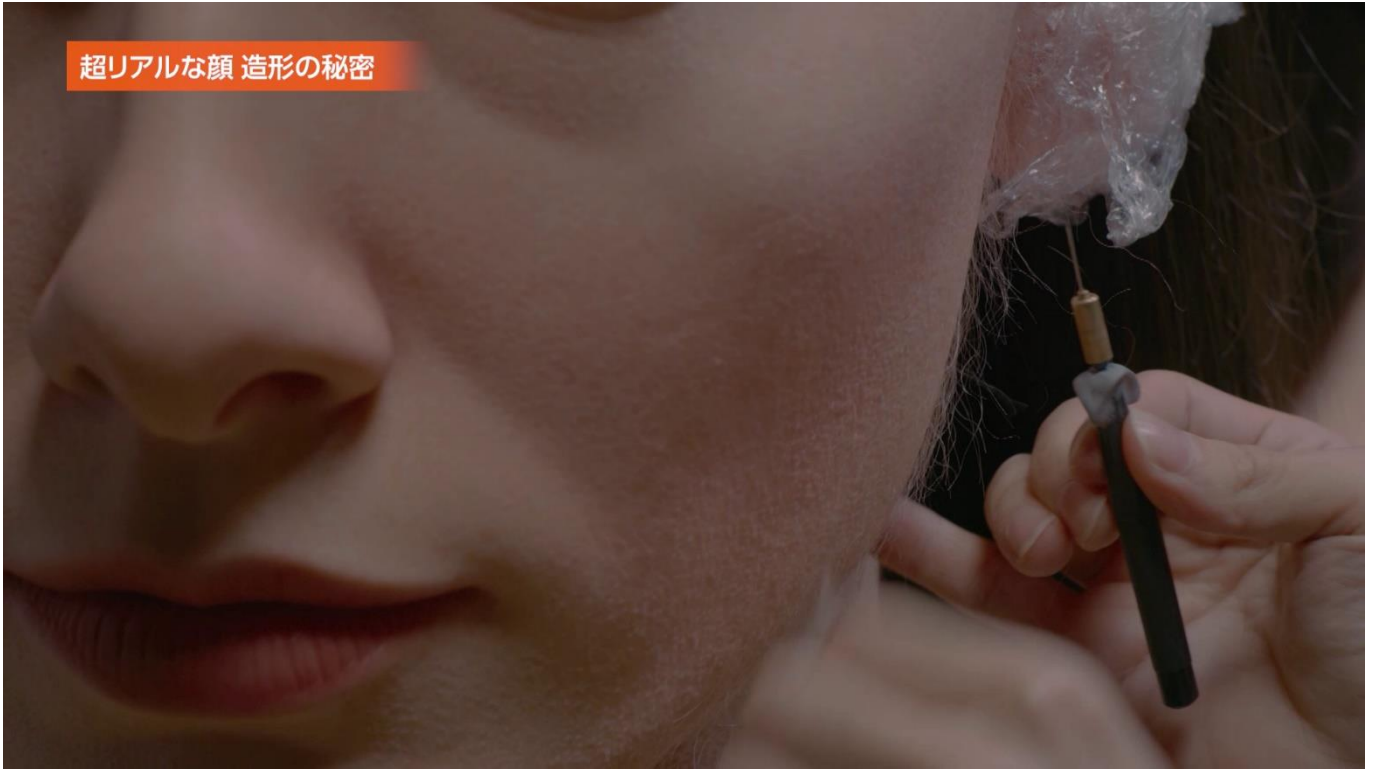
超リアルな顔 造形の秘密



※映像（開始点7分30秒）とあわせてご覧ください。

手伝ってくれているのは、百瀬仁郎くんという日本人の子なんですけれども、いつも手伝ってくれています。毛を1本1本植えて、仕上げていきます。これも大変根気のいる作業です。僕も年を取って、目が見えづらくなってきているので、僕は眉毛やまつげを仕上げていって、あとは仁郎くん髪毛の方向とどれぐらいの密度で植えるのかというのを話しながら、一緒に仕上げていきます。

超リアルな顔 造形の秘密



これは、ほっぺたの産毛をアンゴラの毛で植えているところですね。これもほとんど目に見えない 1 本 1 本の毛なんですけれど…。

超リアルな顔 造形の秘密



まつげや眉毛は、スカンクの毛が売られているので、スカンクの毛皮を使って植えていきます。スカンクの毛がいいのは、割と太いということと、テーパー(先が徐々に細くなる形状)がついていて、毛の長さも長いので、まつげに使いやすいということですね。

作るのも結構大変で、ひとつ作るのに大体最低 6 か月がかかりますから、そんなにいっぱい作れないので

す。

<なぜ「顔」に魅せられたのか>



ここまで行き着くのに、どういうふう to 育ってきたかということを説明していきたいと思います。僕は京都出身です。京都の中心に錦市場というところがあります。いろんな果物や野菜、魚を売っているところなんですけれど、そこで育ったんです。両親が共働きで、ほとんど一人で育ったんですね。幼稚園でよくやっていたのが、クラスの隅の方で、一人で絵を描いたり粘土彫刻をしたりということでした。

子どものとき、虐待を受けていたので…あとは京都の独特の人間関係というんですか、たとえば親戚の家に行ったときに誰かが訪ねてきて、愛想はいいけれど、その人が帰ったらすぐに悪口を言い始めるとか…そういう大人の姿を見ているときに、子どもとしてショックが大きかったんですね。なぜ大人がこういう人の扱いをするのかと。そういった大人の裏表を見て、対人恐怖症になって、一人で過ごすことが多くて、自分でどうしたらいいのかわからない状態だったんです。「なぜ人の顔に興味があるか」というと、結局、恐怖心や自己防衛から顔の観察がはじまったわけです。

なぜ「顔」に魅せられたのか



かなり反抗期があって、やっぱりフラストレーションがたまっていたんでしょうね、好奇心が強かったので、いろんなアホなこともしました。学校生活を通して気付いたのが、日本の義務教育の悪いところだと思うんですけど…大学を受けるための積み重ねの教育なので、「何のために勉強するのか」ということを教えない。ただ覚えて、試験に受かったらうまくいくからというような状態で教えられていたんです。僕自身を感じ取ったこととしては、「ああこの先生も情熱がない。何かを教えたくて教えているのではなくて、これをやったら大学に入れる」という教え方だなということ。やっぱり真剣に授業も受けられなかったんです。

そこでどうしようかということになって、自分でいろいろと探し始めました。学校をとりあえずやめて、仕事を始めたいので、なにかいい仕事がないか。模型が好きだったので、車やロケットなど、いろんなことに興味をもって自分なりにデザインしたり、あるいは図鑑を調べて捕まえてきて昆虫の研究をしたり。「何ができるか」ということを自分で探すために、いろいろとやっていたわけなんですけれども、一番影響が大きかったのが、子どものときに見た映画「スターウォーズ」です。その“特殊効果”に非常に興味を持ったんです。日本のそのころの特撮というのが非常に安っぽかったので、「スターウォーズ」を見たときに「すごいことをやっているな」と思った。「どうやっているのか」という興味から映画に興味を持つようになって、ミニチュアのデザインをしたり、あるいは8ミリで映画を撮ったり、いろいろ探しました。機械工学や化学、生物、いろんなことに興味があったので、これをどうにかつなげられないかと思ったんです。



なぜ「顔」に魅せられたのか

ホラー専門誌
「FANGORIA」

中学生のころから徐々に模索し始めて、とりあえずやってみようと思いました。ちょうどそのころ、ホラー映画がはやっていて、ちょっと調べてみようということで、毎週土曜日に、京都の洋書店に通いました。映画のセクションがあるんですけど、何かおもしろい記事がないかと、雑誌の端から端まで読みました。その中で見つけた雑誌が、「FANGORIA」という雑誌。表紙がホラーなんですけれども、その中に、ディック・スミスさんがリンカーンのメイクをしている写真が出てきたんです。



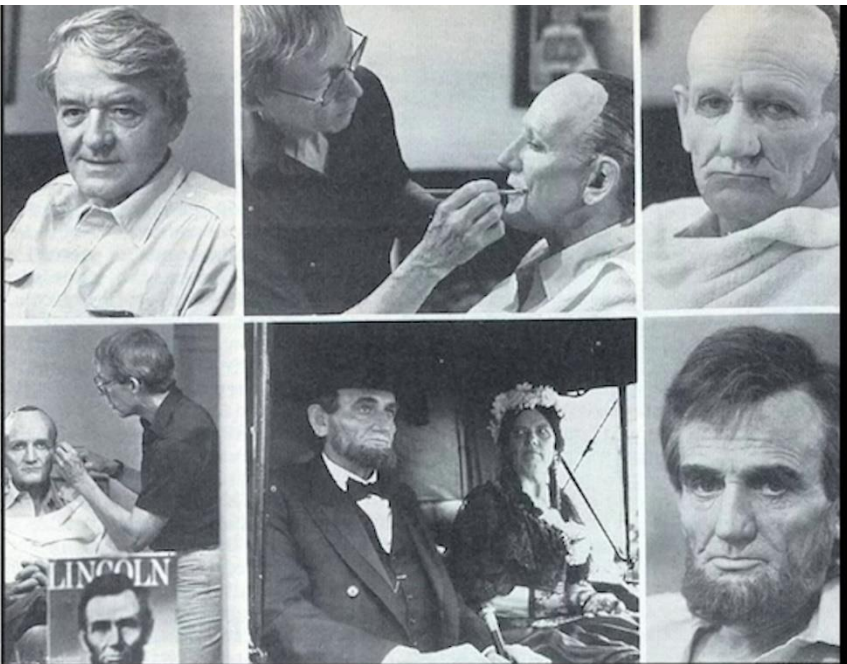
なぜ「顔」に魅せられたのか

for more information). Last issue, he recalled the efforts that went into devising the shockingly realistic horrors of *The Exorcist* and his recent delight at earning an Oscar for a very different type of film, *Amadeus*.
FANGORIA: Most movie makeup that is appreciated by the public is bizarre makeup: things that change the human condition. And with *Amadeus*, you were honored with an Oscar for makeup that basically displayed the human condition. Do you have any preferences of what type of work you like to do?

Dick Smith: Well, character makeup is my favorite; I do prefer that, *Little Big Man*, *The Godfather*. The character things are perhaps what I'm best known for, and they are what I enjoy most. I've often said that my thrill comes when I've got the appliances on, and I've got the first layer of color on, and it begins to take life; it

ホラー専門誌
「FANGORIA」

personage. you feel like you have a life of its own. I can get a big thrill out of that.
Fang: You're now offering a formal makeup course through the mail



Smith transformed Hal Holbrook into Honest Abe for *North and South*.

I'll give him a certificate. If they're not, I'll tell him why, suggest ways in which he can improve his work, and

takes. I'm also incorporating into the course something which I think is going to be very useful: an update ser-

それを見たときに「これしかない。これをやりたい」と。顔型を取って、彫刻をして、かたどって、張り付けて、色を塗って、別の人物を作り上げていく。自分の興味があるもの全てが集約された一つの仕事になってい

たので、とりあえずやりたいということで、次の日から学校の図書館にリンカーンの資料を探しに行って、歯科材料店に行ったりして材料を集めて、自分で顔型を取って、自分でメイクを始めるようになりました。

<巨匠との文通からはじまった 特殊メイクの道>



ディック・スミスさんは、映画「エクソシスト」や「ゴッドファーザー」、「アマデウス」などでメイクをされた方で、「アマデウス」でアカデミー賞を取られた方です。

「この人みたいになりたい」ということでやっていたのが、毎週テーマを決めて、自分の顔型に新しいメイクを月曜日火曜日で彫刻して、水曜日にかたどって、木曜日にフォームラテックス(天然ゴムを加熱・発泡させた素材)を焼いて、週末にそれを貼り付けること。それを繰り返していました。

それを2~3か月続けたあと、ディックさんの私書箱をある雑誌で見つけて、手紙を送ったんですね。そのころはEメールもファックスもなかったので、手紙を送るしかなかったんですけど、最初の手紙には「○○をしたい。学校に行くべきなのか。どうしたらいいか」という質問を書いて送ったんです。それでびっくりしたんですけど、10日間ぐらいして返事が来て…そのときは非常に興奮して、封筒を開ける手も震えていました。そこで読んだのが「今アメリカには大した学校がないので、独学で勉強するのが一番だ」と。作品の写真をディックさんのところに送ったら、その評価をしてあげると言われたんです。

巨匠との文通からはじまった
特殊メイクの道

Make-Up Illusions, Inc.
209 MURRAY AVENUE, LARCHMONT, NEW YORK 10538 PHONE: 914 834-7098

July 6, 1987

Dear Kazuhiro Sawa,

There really are not any good schools for special effects make-up in the United States either. There are only three schools for professional film make-up in Los Angeles. They are private schools run by or taught by mediocre make-up artists and they do not get into very advanced make-up and special effect techniques.

The fact is that special make-up effects is a very small field that employs only a small number of professional make-up artists. Most of them are self-taught or have worked in the shop of some top make-up artist.

It is difficult for me to advise you without knowing more about your talent, experience and interest in make-up. Have you done any kind of make-up or any other arts or crafts? Do you have photos of your work? If you have, I would like to see some photos so that I can get some idea of your artistic talents. If you have not worked creatively with your hands and eyes, it would be better to choose a line of work for which you have already demonstrated some talent.

If ^{you} do have great artistic skill in some field, it might be possible to get you some beginner's job at a make-up shop in Los Angeles for several months.

Do you have any friends or relatives living in Los Angeles with whom you could stay? Do you speak and read English as well as you write it? Your letter is perfect.

Write me some more details and then perhaps I can tell you what would be best for you to do.

Yours truly,

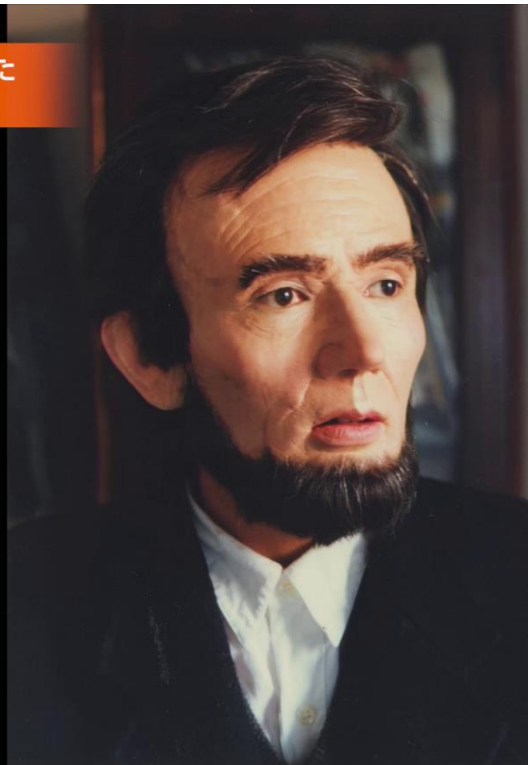


Dick Smith

ディック・スミスから
実際に届いた手紙

それからまた自分で作り続けて、でもしばらくは送らなかつたんです。というのは、良い作品ができるまで送らなかつたので。いろいろと作ったあと、多分1か月~2か月ぐらいあとに、僕自身にしたリンカーンのメイクの写真を送りました。この写真(下画像)は多分3つ目ぐらいだったんですけど、自分でかつらを作って、自分に貼り付けて、写真を撮って。

巨匠との文通からはじまった
特殊メイクの道



ディック・スミスに
送った写真

そしてその評価をしてもらったんです。文通みたいな感じですね。それをずっと続けていました(海を越えた文通添削は8か月で12往復にのぼる)。

巨匠との文通からはじまった
特殊メイクの道

I have received your photos and am so proud of you. Your dummy head is superb. The way you resculpted the eyes and mouth is so real and the coloring and hair work, especially the eyebrows are beautiful.

カズヒロさま

写真を見て誇らしく思った 君の作品はすばらしい

目や口はとてもリアルで色も良いし

髪の毛や眉毛は美しい

巨匠との文通からはじまった
特殊メイクの道

You have indeed fulfilled the promise I saw in you. Your other creations are also ingenious.

トップレベルの仕事だよ 僕が見込んだとおりだ

I would love to have you visit me next year but it would be better for you to spend your time and money in Hollywood. There is a little in New York. Perhaps I could meet you in Hollywood.

Do you have a holiday on Christmas in

1987年のハロウィンのときに、ディックさんから電話番号を送ってくれと連絡がきて、手紙で電話番号を送ったんです。そうしたら、家にディックさんから電話があって、はっきり言って英語も中途半端だったので、そのときに何の話をしたかをはっきりと覚えていないんですけど、要点としては「ハロウィンのときにハロウィンコンテストがあって日本に行くから会えないか」と。ぼくも「ぜひ会いたい」ということで、東京に会いに行きました。そのときに、「来年、日本の工房で『スウィートホーム』という映画のスーパーバイザーをするので、スタッフの一人として参加しないか」と言われたんです。「もちろん参加する」とこたえました。

巨匠との文通からはじまった
特殊メイクの道



伊丹十三監督の作品など
日本映画の特殊メイクを始める

そのときに必死だったのが、高校3年生だったのでほとんどの人が受験に集中していたんですね、僕自身は毎日家に帰って特殊メイクの彫刻をして、いいものができるようにいろいろと努力して、仕事の準備ですね。それを必死でやっていました。そして高校を卒業して1週間後に、東京の特殊メイクアップスタジオに入りました。

巨匠との文通からはじまった
特殊メイクの道



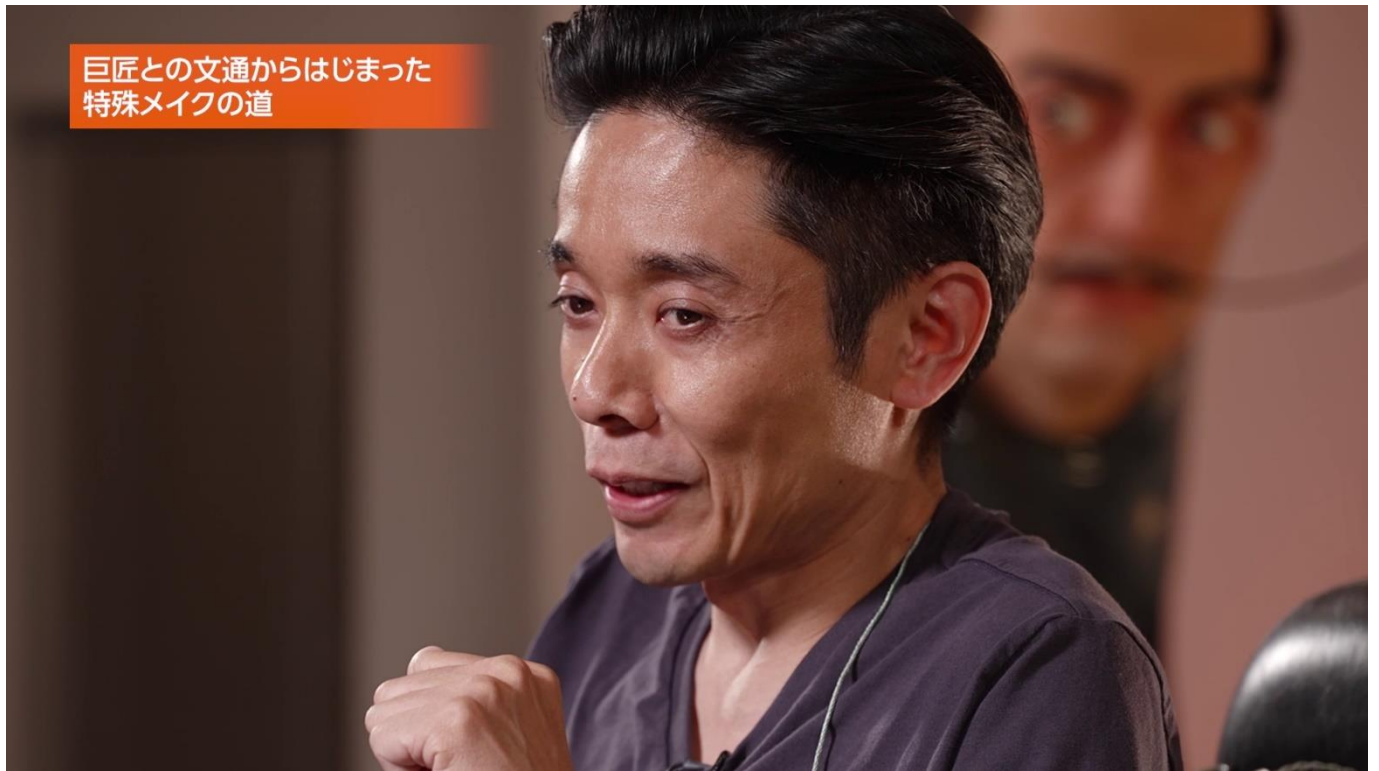
カズ・ヒロさん

ディック・スミスさん

スミス氏の紹介で高校卒業と同時に
東京の特殊メイクアップスタジオに就職

ディックさんはスーパーバイザーなので、日本におられたのは2週間~3週間ぐらいだったんですけど、そのときにいろいろ話をしました。よかったのが、ディックさんが“特殊メイクの文通コース”みたいなものをプロフェッショナル用に作っていたんですね。多分そのころ、アメリカの値段で2,000ドル、つまり日本円で20

万円ぐらいしたんですけれど、それを持ってこられて「お金はいつでもええから、とりあえず勉強しなさい」と渡されたんです。それから必死になって勉強しました。



そんなに簡単にはいかなかったんですけれど、気分的には高校卒業してすぐにアメリカに行くつもりだったので、できるだけ洋書を読んで、英語を身に付けました。僕自身の成績というのは美術以外のほとんどの科目が悪くて、英語の本を読み始めたり、たとえば特殊メイクのことを考えるときにはできるだけ英語で考えるようにしたりしました。「スウィートホーム」の仕事のとき、アメリカのスタッフが5人ぐらいいて、やっぱり英語でコミュニケーションしないと仕事にならないので、僕もアメリカ人が住んでいるアパートと一緒に住んで、毎日一緒に通って、仕事が終わったら一緒に帰ってというふうにして、できるだけ英語を身に付けるようにしていたわけです。

そのときの生活状況を言うと、お金がほとんどなかったなので、そのアメリカ人が泊まっているマンションもかなり高かったのでほとんどお金も残らず、1日確か1,000円ぐらいの食費で、6か月ぐらい生活していました。給料もそれほどもらっていませんでしたからね。それで必死に頑張っ、この「スウィートホーム」が終わったらアメリカに行こうと思っていたんですけれど、結局それほど簡単にはいかないものですね。

<黒澤明監督から学んだこと>

黒澤明監督から学んだこと



東京の特殊メイクアップスタジオに大体2年半いたわけですが、「どうしても自分のやり方でやりたい」というフラストレーションがたまって、辞めさせてくれというふうに話をしたんです。

その話をしていたとき、9月に突然電話がかかってきて、電話の相手が誰かというとき、黒澤明監督のプロダクションからだったんです。プロデューサーから言われたのが、「今度リチャード・ギアが映画に出るんだけど、リチャード・ギアが僕にメイクをしてもらいたいと言って電話が来たので、仕事できるか」と。突拍子もない話だったので、最初は冗談かと思いました。リチャード・ギアと言ったら、もちろんそのころ非常に有名でしたから、どういうふうにこんな話が来たのかと。「とりあえずミーティングをしたいから来てくれ」と言われて、ミーティングの予定を組んだんです。

「これは多分ディックさんや」というふうに気付いて、ディックさんに電話したら、「日本で撮影するからメイクアップアーティストを紹介してほしい」と言われたそうで、「カズしかいない」と紹介してくれていたんです。ただ問題は、僕はそのころまだ20歳か21歳くらいだったので経験は全くありませんし、仕事慣れもしていない。どうすればいいのかと。それで、とりあえず9月に特殊メイクアップスタジオを辞めて、その仕事を取ったんです。

黒澤明監督から学んだこと



できるだけのことをして頑張ったんですけども、最初はやっぱり不慣れで…。黒澤監督と初めて会ったとき、あの人は多分 190cm ぐらいあるんですか、大きいトドみたいな…(笑)。非常に大きい人で、非常に優しい人でした。いろんなうわさを聞いたんですけども、非常に厳しいから仕事はしづらいと。よくそういううわさというのはあるんですけど、仕事の厳しさで仕事をしづらい人というのは、結局、その仕事をやった人がだめであって、本人さえしっかりやっていたら、受け入れて励まして一緒に仕事をしてくれるんです。

そこでとりあえずリチャード・ギアにテストメイクをして、そのときに決まっていたのが、黒澤監督は「特殊メイクは要らない」ということでした。でも、リチャード・ギアが特殊メイクをしたいと言うので、とりあえずテストだけはしてくれということで、テストメイクをしました。結局、黒澤監督の映画なので、やっぱり特殊メイクはしなくてよかったんですけど。

非常に良かったのが、世界のトップの監督と仕事をしたことで、どういうふうに現場が進んで、どんな状態で映画を作っているかを見ることができた。そして正直な話、黒澤監督以外のプロダクションで、日本で映画を撮る場合、やっぱりすごい差があるんですね。予算もそうですし、手間のかけ方もそうですし。実際にここまでするんだという経験ができて、非常に良かったです。

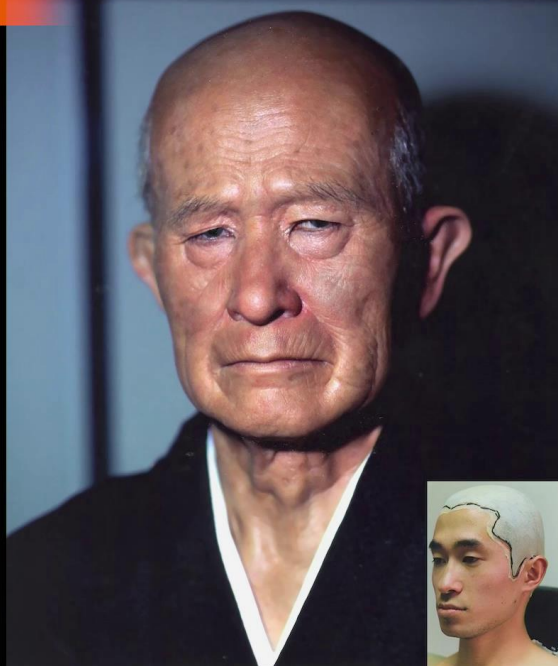
<進退かけたメイクでつかんだアメリカへの切符>

進退かけたメイクでつかんだ
アメリカへの切符



自分で工房を抱えて仕事を始めたんですけども、やっぱり最初は小さい仕事しか取れなくて、いろいろとこなしていたんですけど、ひとつ日本のテレビ番組で、有名な役者さん2人を老けさせるメイクの話があったんです。それをやったあとになかなかうまくいなくて・・・みんなは「良い」と言ってくれたんですけど、自分的には納得がいけないということで悩み始めました。自分には特殊メイクが向いていないのかなと、才能がないんじゃないかというふうに疑い始めたんです。かなり悩んで、とりあえず自分のやりたい方法で十分な時間をかけてメイクをしたらどこまでできるのかということを試して、もしこれがうまくいかなかったらもうやめようと思断して、それで1か月半ぐらいかけて友達に老人メイクをして作り上げたんですね(下画像)。そのころフォームが主体でほとんどメイクされたんですけど、これはゼラチンとかウレタンとかいろんな素材を混ぜて使って「ああ、これはうまくいった」と思いました。これがのちのちいい方につながっていくわけです。

進退かけたメイクでつかんだ
アメリカへの切符



メイクが出来上がったあとに、最初にディック・スミスさんに送って、それがリック・ベイカーさんの手に渡って・・・リックさんが見たときに言った言葉が、英語で言うと「I hate this guy」。つまり、「こいつ、俺は嫌いだ」と。というのは、「メイクがうますぎるから嫌いだ」と。この人は特に嫌味をよく言う人なんだけれども(笑)、それで伝わっていったわけです。

進退かけたメイクでつかんだ
アメリカへの切符



リック・ベイカー
(1950~)

宇宙人やモンスターの特殊メイクを得意とする
特殊メイクアップアーティスト

しばらく日本でやっていたんですが、ちょうどそのころ、バブル崩壊で経済が崩れて、映画が作れなくなったんです。作られる映画と言えば、Vシネマ。予算のない映画で、非常に嫌気がさして、生活もできないし、どうしようかと悩みました。そこでまたディックさんが助けに入ってきてくれたんです。

ある日、ディックさんから電話があって、「日本で来年からこの学校が始まる」と。「今のところ講師を誰がするか知らないが、興味はあるか。でももし講師の仕事をしたら、本来の仕事ができなくなるから、あまり推薦はしなかった」と言われました。「経済が非常に悪くてなかなか仕事もないから、やった方がいいのでやらせてくれ」ということで、そこで講師を始めたんです。講師は3年半ぐらやっていました。非常にいい経験だったんですけども、教えるにも、僕自身がそのころ22歳。22歳が、18歳から29歳の人たちに教えていたわけですね。子どもが子どもに教えているようなものだった。ただやっぱり若いときのエゴ、もちろん情熱もありましたから、いいものを教えたいと必死に教えました。

そして3年ぐらいて、「『アメリカへ行く』という自分の夢もかなえていないのに、なぜ人に教えているんだ」と気づき始めて、これはどうにかしないといけないと。それに気付いて、「スウィートホーム」で一緒に仕事をしたエディ・ヤンという親友に「来年は違法でもアメリカに行って仕事を探すから手伝ってくれ」と伝えたんです。ちょうどそのときにリックさんが「Men In Black」という映画のデザインを始めていて、エディから「リックさんが、特殊メイクの最初から最後まで、デザインから仕上げまでできる人を探している」と。「いつでもいいから来い。こっちでビザを取って雇えるから」と。

それまでビザというのは、長期契約でないと取れないワーキングビザですね、就労ビザ、あるいはグリーンカードも結婚しない限りは抽選という方法しかなかったので、いろいろと試してはいましたけれど、その方法がなかったんです。そんなときにちょうどディックさんが引っ張り上げてくれた。だからディック・スミスさんという人は非常に偉大な方で、ただ単に作品を見てもすごい方なんですけれど、一流のプロになれるようにいろんな方を育てて手助けしていらっしやる。それでアメリカに移住しました。

<アメリカの映画界に飛び込んで>



最初にかかわった仕事が映画「Men In Black」です。僕自身あまり知らなかったんですけど、これは結構有名な漫画を原題にして実写化したもので、上の写真に出ているのが、エドガーというエイリアン、エドガー自身は農夫なんですけれど、宇宙人が降りてきて顔を剥いで、それをかぶって人間のふりをしている。そしてだんだん皮が腐ってきて、エイリアンが出てくるという設定だったんです。その最初から、彫刻からデザイン、デザインはリックさんと一緒にやったんですけども、素材の開発をやりました。僕自身、新しい素材を開発するのが好きだったので、リックさんが任せてくれました。徐々にいろんな人がシリコンのゴムに気付き始めて、どうしたら使えるのかと。そのころあったシリコンというのは整形手術用のシリコンしかなかったもので、あとは補強のシリコンですね。それをどうやって使うかということをいろいろと試して、1か月ぐらいかけて開発してメイクに使いました。



大変だったのが、日本人は勤勉なので、朝から晩まで仕事をしていますけれども、アメリカ人というのは夕方5時になったら家に帰るとというのが普通だったんです。考え方も違いました。こちらはこちらでいいものを作りたいので必死になって、口論になったときもありました。もし「こんなものはできない」と言われたら、それを自分で実際にやってみて、「こうやったらできる」と説得しながら、どんどん技術を上げていくようにしました。

大きかったのが、「Men In Black」が終わったあとに「Mighty Joe Young」という映画が始まって、リックさんに「いいものを作るから、任せてくれ」と言って、目とまつげと目玉を作らせてもらったことです。それで徐々に徐々に認められていって、そのあといろんな仕事でスーパーバイザーとして任されるようになったんです。

アメリカの映画界に飛び込んで



映画 [Planet of the Apes] (2001)
主演:マーク・ウォルバーグ 監督:ティム・バートン

映画「Planet of the Apes」では、役者の表情が人工皮膚に伝わる手法を確立。

アメリカの映画界に飛び込んで

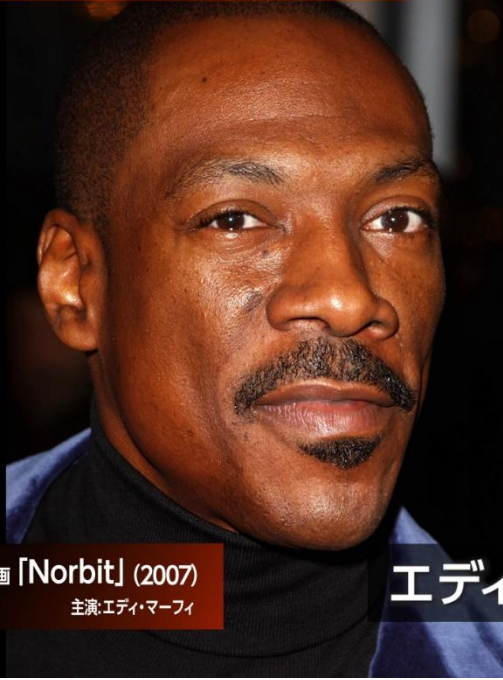


瞳孔の位置がずれない
カラーコンタクトの開発

映画 [Hellboy] (2004)
監督:ギレルモ・デル・トロ

映画「Hellboy」では、瞳孔の位置がずれないカラーコンタクトを開発。

アメリカの映画界に飛び込んで



映画「Norbit」(2007)
主演:エディ・マーフィ

エディ・マーフィを巨漢の女性や



映画「Norbit」では、エディ・マーフィを巨漢の女性や中国人男性に。

アメリカの映画界に飛び込んで



映画「The Curious Case of Benjamin Button」(2007)
主演:ブラッド・ピット 監督:デビッド・フィンチャー

ブラッド・ピットを老人に

映画「The Curious Case of Benjamin Button」では、ブラッド・ピットを老人に変身させる。

カズ・ヒロは、次々と新しい手法を確立し、ハリウッドで欠かせない存在となる。

<Q&A パート①>



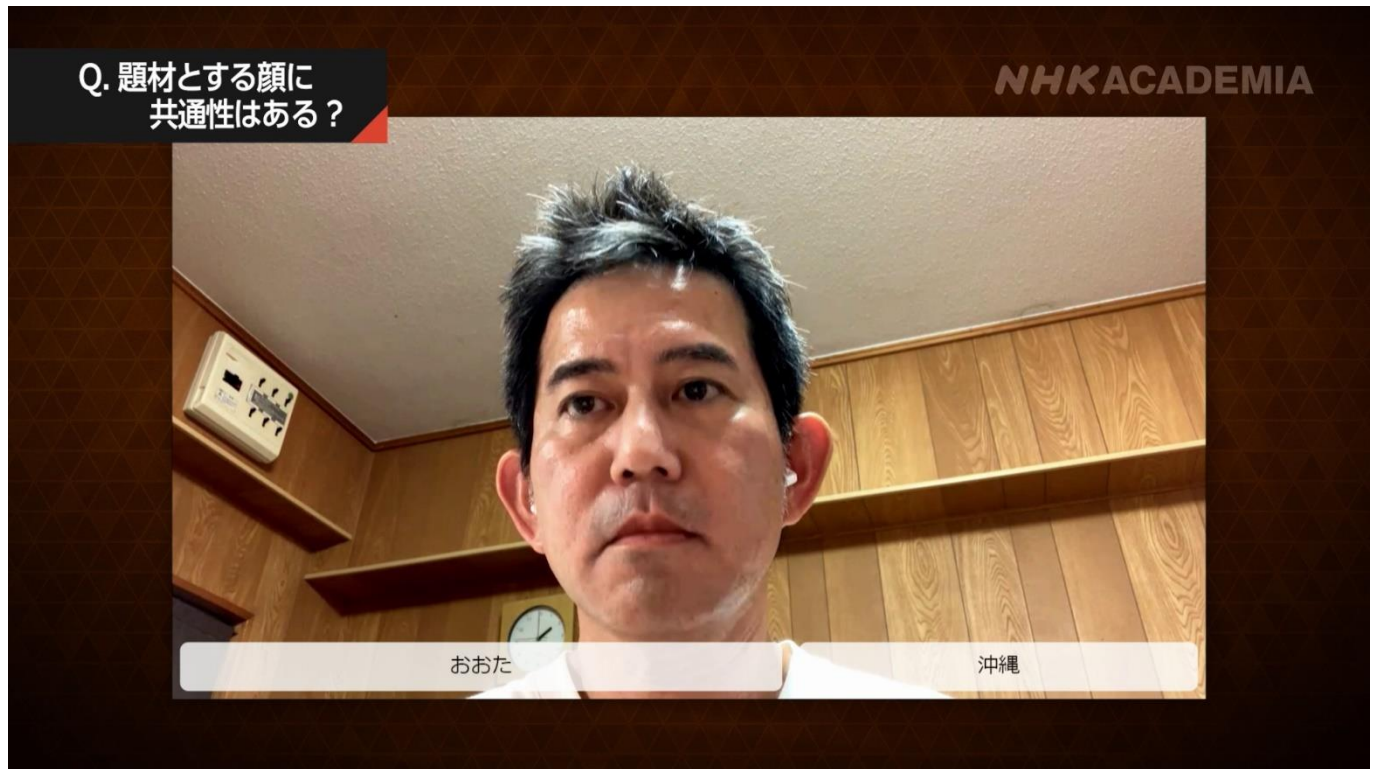
カズ・ヒロさん「東京のアイコさん」



アイコさん「カズ・ヒロさんは、お仕事で実在の人物の顔を作られていることが多いと思うんですけども、実在ではないカズ・ヒロさんオリジナルの顔を造形するという事は、これからあるんでしょうか」

カズ・ヒロさん「今までそういう仕事がなかったですね。“誰でもない”というのはありましたけれど。僕自身、『誰かにする』とか、『誰かに似せる』とか、『誰かを表現する』というチャレンジが好きなので、“誰でもない”というのはあまり興味がない。“最高のもの”というのは『自然』と思っています。人それぞれ人生を歩ん

で、それが表情としてあるいは顔として出てきているので、それを学びたいのと、自然を一番尊敬しています。結局、自然が完璧なので。人間のやることは完璧ではないですから。だからそれを表現するために観察して読み取って、そして表現していくという方法が好きなので、そういうふうをしています」



おおたさん「カズ・ヒロさんの作品、ファインアートの方なんですけれど、扱っている人物が違うんですが、共通する部分もあるように感じます。そのあたりの作家性みたいなものは、ご自身ではどういうふうに考えてらっしゃいますか？」

カズ・ヒロさん「僕が引かれる顔、人の人生というのは、僕みたいにトラウマがあった人が多いので、多分、それを感じてくると思います。だからその顔に興味を持って引かれるというのがあると思います。つらいことやひどいことを経験して、そこから上がっていった人というのは、やっぱりそういう顔として出てくるので、それを感じているんでしょうね。結局、そういう顔を自然に選んでいることになっていると思います」

おおたさん「ご自分の顔を作りたいと思いますか？」

カズ・ヒロさん「自分の顔は全く興味ないです。わざわざ作る必要はないと思っています(笑)」



hira さん「現状が自分に合っていないから何かを変えたいと思っている人、現状をもっとよくしたいと思っている人に向けて、何かアドバイスはありますか」

カズ・ヒロさん「まず大事なのが、なぜ合っていないというふうに感じているかを理解すること。ただ単に嫌とかではなくて。子どものときに興味を持ったことというのは、やっぱり非常に正直だと思うんですよね。自分の芯の部分ですね。何がやりたいか、何が好きか、どういうものに引かれるか。自然と目について、やりたいと思うので。

僕自身は学校というのが嫌いでした。いろんな人と集まって一緒にことをするというのは大嫌いなんです。独学がやっぱり一番向いていたんです。そこで自分なりの方法を考えて、作っていったわけです。人生長くて短いので、とりあえず20歳で頑張っているいろいろ作り上げて、いろんなことを試して、いろんな失敗をして・・・失敗を恐れずにどんどんいろんなことをする。30代で、その作り上げたものをまた伸ばして、40代で安定するという感じですね。50歳ぐらいになったら、もう老いていく一方ですから(笑)。あとは、余計な人の意見や一般的に言われているようなやり方はやらない方がいいです。というのは、人それぞれ全部違うので、自分のやり方を見つけないとうまくいかないです」

<よみがえる「トラウマ」>



アメリカで“ユニオン”というのがあって、つまり組合ですね、例えばメイクアップアーティストのユニオンとか、カメラマンのユニオンとか。それはつまりそれぞれの人が公平にお金をもらって、仕事の状況をいいものにしていくように、みんなで話し合って決めていくという組合です。1本仕事をして、ユニオンに入って。

映画「How the Grinch Stole Christmas」の仕事が来たときに、リックさんから「ジム・キャリーのメイクをするからできないか」と言われて、「OK。やってみます」と返事をしました。そのあといろいろなうわさ話を聞いたんですね。「非常に仕事がしづらい」と。あれは多分一番大きかった仕事の一つで、準備に6か月、撮影に6か月費やしました。いろいろなデザインをしたあとに、テストメイクをやって・・・実際、最初のころは非常に大変で、ジム・キャリーがセットからいなくなったり、突然帰ってきたらカツラがペロペロになっていて撮影ができなかったり・・・。「何が問題？」と話していたら、「コンタクトをつけているので、目に偽物の雪が入って痛い。こんな状態では仕事はできない」と。それでみんなに当たったり、僕にもメイク中に突然立ち上がって「ここ(あご)の色が違う。昨日の色と違う」と言ったり。全く一緒の色を使っているんですけどね。そして突然走り出して、メイクアップのトレーラーから出て、30分ぐらいしてから帰ってきて・・・それが毎日続いたんです。いろいろなスタッフに当たり散らして、これでは撮影ができないと。僕自身も精神的に耐えられなくなって。

そのときにプロデューサーとリックさんと僕とで話をしたんです。リックさんが「お前は1週間ぐらい隠れておけ」と。それで「誰かほかの人を連れてくる。そうしたらお前がどれだけ良かったかがわかる」というふうに言われて、僕は家に隠れて、ほかのメイクアップアーティストさんがジム・キャリーのメイクをしばらくしたんです。それで実感したわけですね、僕がどれだけ早くて良かったかというのを。ジムから電話が何回かあったんですけど、しばらく僕は反応しませんでした。2週間目が終わったところに、監督から電話があって、「ジムも反省している。どうにかするから帰ってきてくれ。仕事ができない、撮影もできないから」と。そのときに友達と「どうしようか」と話したんです。そうしたら友達が「お給料を上げてもらえ」と。でも日本人なので、お金を頼むのもちょっといやらしいなということを話して。「それならグリーンカードを取ってもらおう」と。それでスタジオの全員ですね、監督、役者全員から推薦状を取ってもらって、アメリカの移民局に

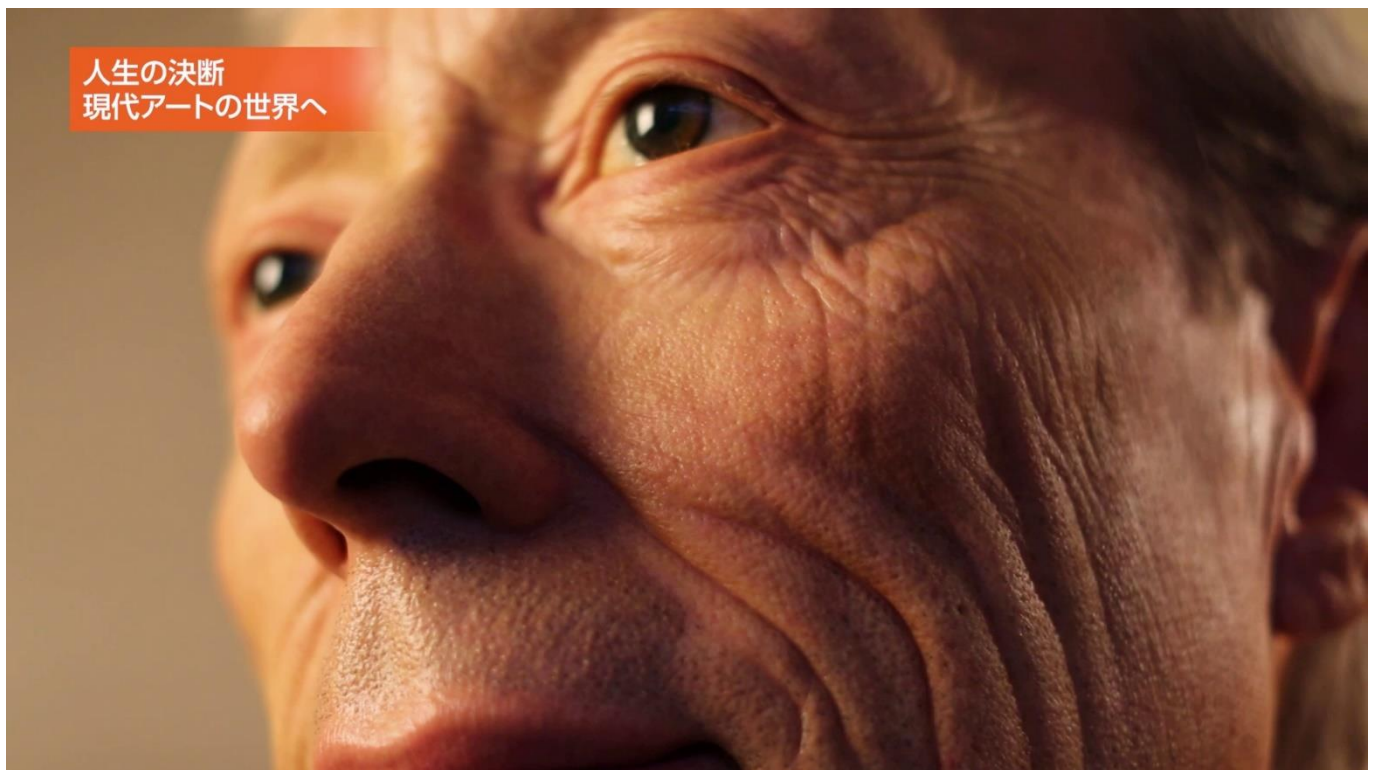
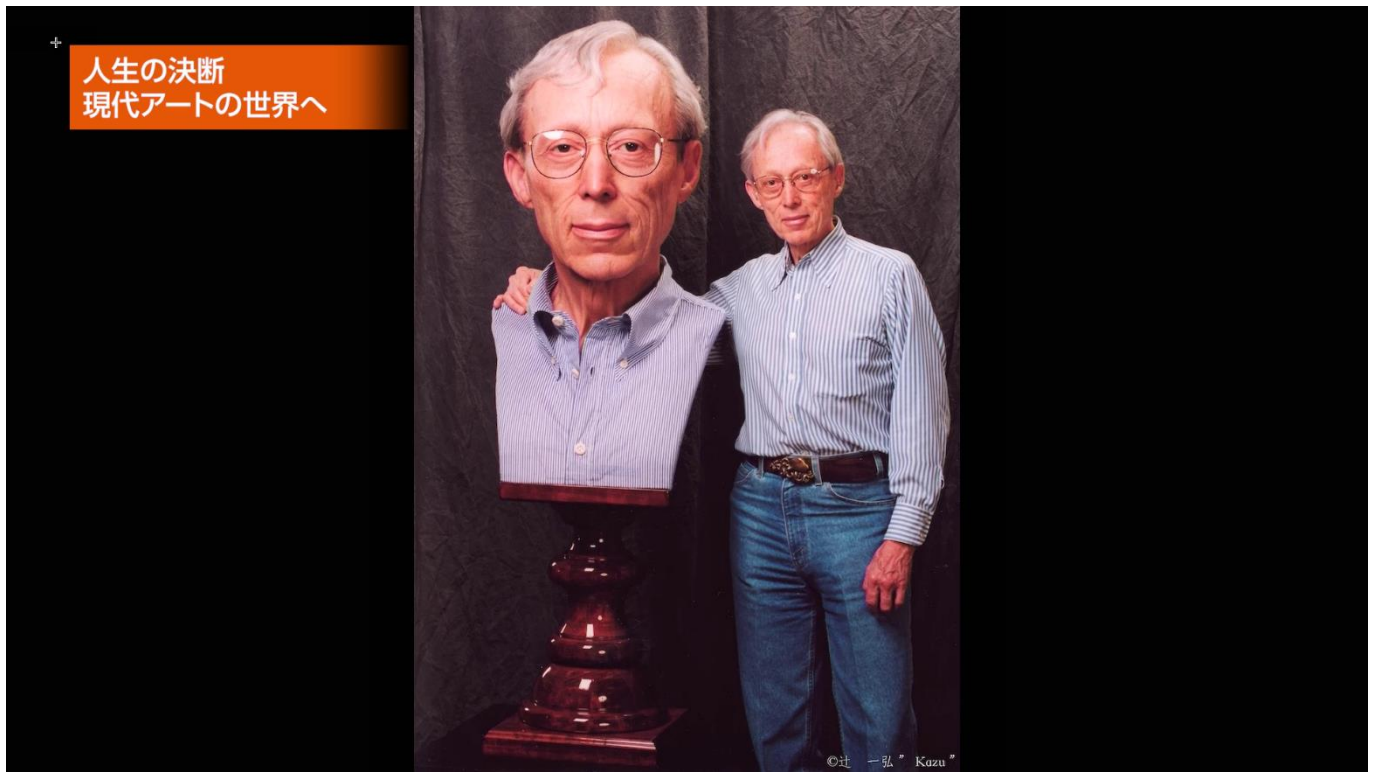
送ってグリーンカードの申請をしたんです。一回目は断られたんですけどね。そして、僕も日本人で、日本人の悪い癖で、「リックさんに雇われたので、リックさんに迷惑をかけたらいけないから、我慢して撮影を終わらせないといけない」ということで、結局確か100日以上メイクをしました。



そのあとやっぱり精神的にかなりダメージを受けたので、カウンセラーのところに行って、しばらく話をしたんです。そこでわかったのが、子ども時代のトラウマが、人間の精神的な構造としては、子どものときに何かあったときにどう反応するかというのは人によって違うんですけど、多くあるのがその部分を遮断してしまって忘れるというようなことがあるんです。ひどい経験があったあとに、その中にこもっているものですね、それが反応して出てきたわけですね。怒りやいらだち、うつですよ。それがわかったというのは良かったんですけど、子どものときにどういうことがあったかというのを自分の中で思い出してきて、それからどうするかということで、かなりの間悩みました。

<人生の決断 現代アートの世界へ>

いろいろ現場の経験をして、メイクは好きなんですけれど、やっぱりメイクの仕事は大変なんです。特殊メイクは特にそうで、デザインから始めて、彫刻、かたどり、成形、テストメイク…仕事によりまして、最低でも2か月はかけます。撮影前に。そして撮影に入って、2~3か月して終わる。準備段階から非常に大変なんです。休みもないですし。できるだけいいものを作るために、彫刻に時間をかけたり、ほとんど1日、寝る時間もなかったり、最低16時間仕事をやり続けて、結局、5か月ぐらいずっと仕事をしたきりになるわけです。かなり精神的な負担と体力的な負担を感じてきたのと、特殊メイクをやっていたのが2012年までなんですけれど、いろいろやっている中でなかなかやりたい仕事来ない、役者さんもいい人もいたんですけど、トラウマのようになってしまう役者さんもいて…情熱がどんどん薄れていったわけですね。このままでいいのかというふうになって、最終的に人生についていろいろと考え出して、映画の仕事を辞めようということで辞めました。ハリウッドを離れるというふうにして決断をしたんです。



ディック・スミスさんが2002年にちょうど80歳の誕生日だったので、そのために何かやってあげたいということで、いろいろ考えて作ったのが、2倍サイズのポートレートです。それを作ってディックさんに見せたら、非常に感動されて、もう泣きながら見られたわけです。

映画の仕事というのはグループの仕事なので、いろんな人が関わって仕事をやっていく。このファインアートは、一人で作り上げて、結果として出していく。あと、映画のスクリーンに投影する必要はないから、例えば美術館などに置いて、それを見て反応している人を見られるわけです。そこが、おもしろいなど。もう少し出

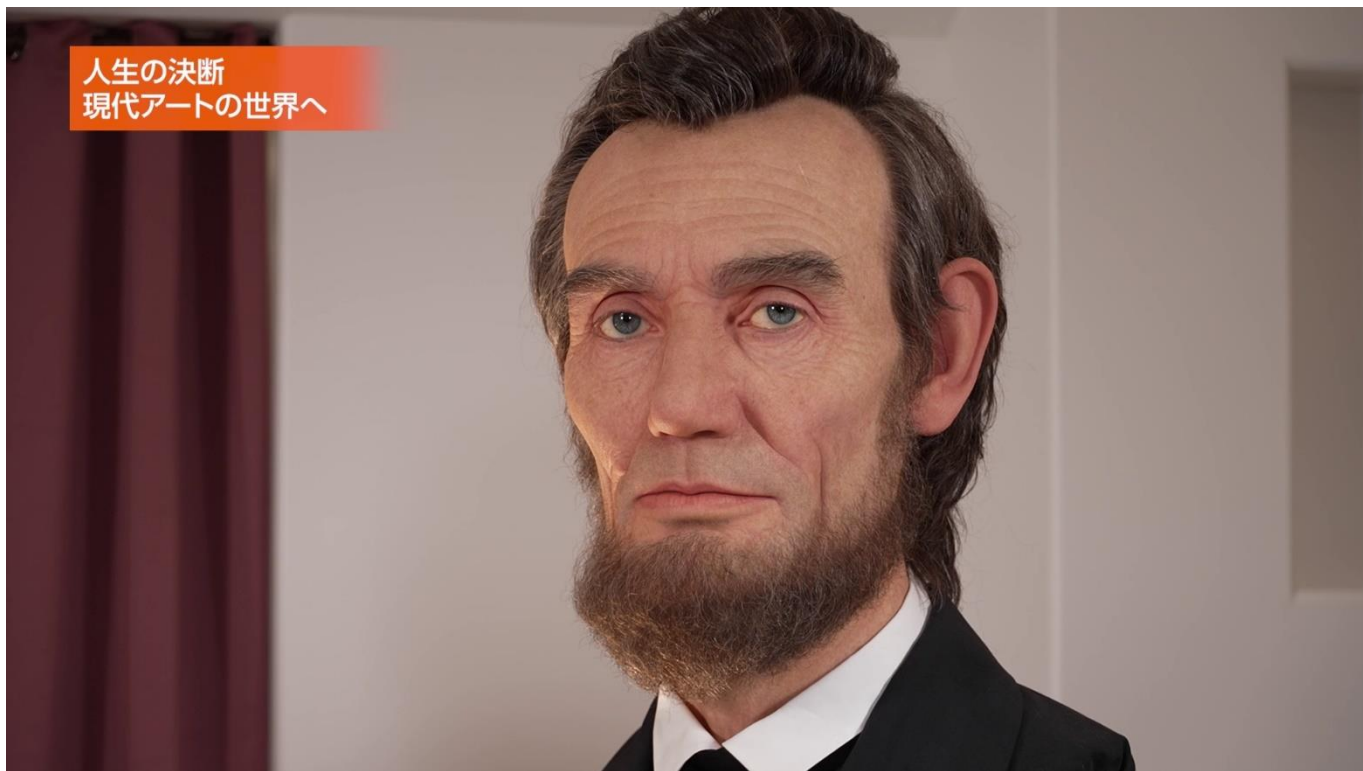
来上がったものをつなげたものを作りたい、つまり自分とのつながりの深いものを作りたいと思ったんです。

一般的な考えで、アートでは生活できないというふうなことを聞いていたので…すごく昔の考えではアートで高いお金をもらえるのは亡くなった人ぐらいだということで、実際に作って売って、特に僕が作りたいたものは一般的に買えるものではないので、どうしようかと悩んでいたんです。ディックさんにも相談しました。ディックさんのお父さんが、ファインアート、絵画をやっていて、ディックさんが子どものころは生活が大変だったというふうに言われたんです。ほとんど諦めかけて、どうしようか思っていました。でも、やっぱり映画の仕事も合わないというふうに考えて、これはもう人生を変えるしかないということで、映画「Looper」の仕事が終わったあと、全部映画の仕事を断ったんです。

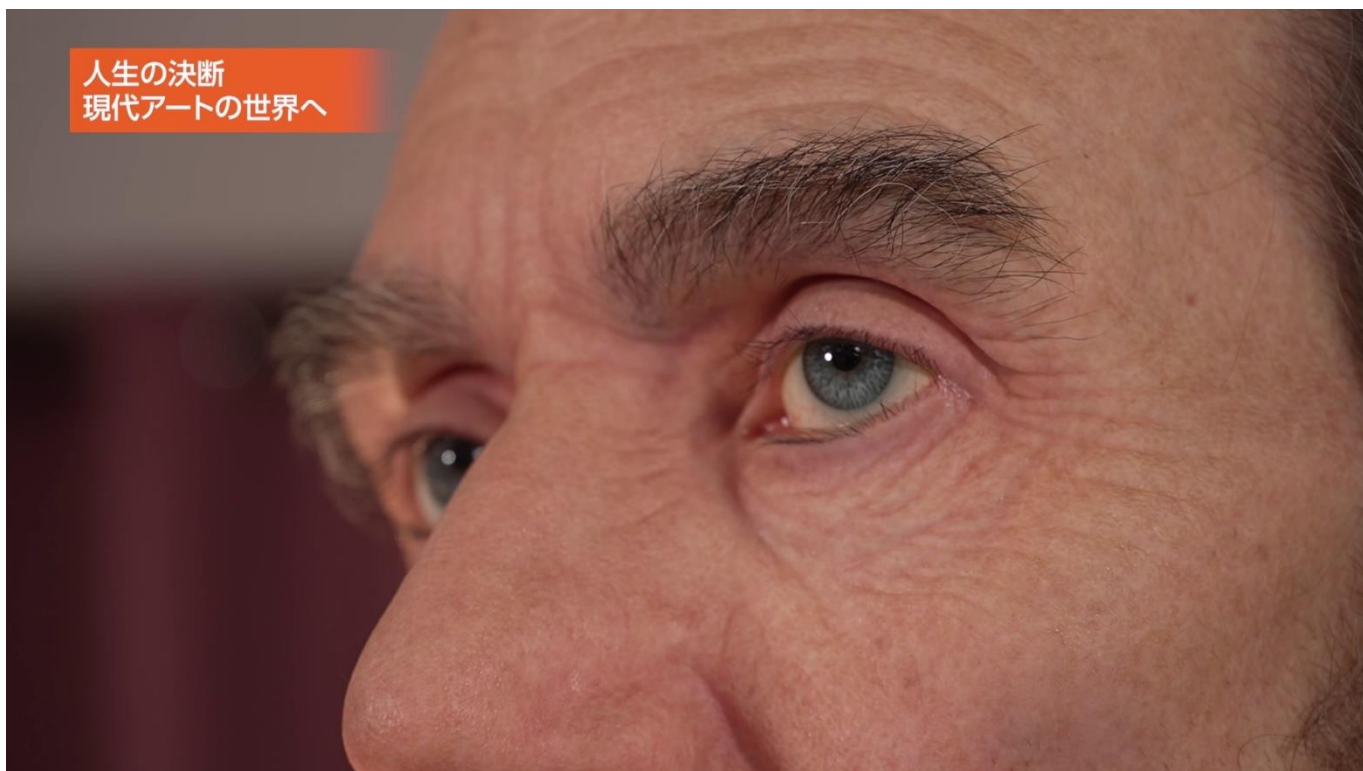


ディック・スミスさんが亡くなられたとき、亡くなる1日前に病院に行ったんです。ベッドに横たわって抜け殻の状態ですね、ほとんど亡くなられている状態になっていて…それを自分の人生に照らし合わせて、残りの人生で何をやったらいいんだろうと考えたんです。このまま続けて終わりたくないと考えて、現代美術をとりあえずやってみようということで、決心してやりました。

人生の決断
現代アートの世界へ



人生の決断
現代アートの世界へ



最初に作ったのが、リンカーンのポートレートです。これは最初に特殊メイクに興味を持って、リンカーンの顔が好きだったので、それをとりあえず元にして、リンカーンを題材にして作りました。アメリカのギャラリーに出したら評判が良くて、最初を買ってくれたのが大手スポーツ用品メーカーの社長です。まずリンカーンで、アンディ・ウォーホル、ダリ、フリーダ・カーロといろいろ作って、一つ一つ出来上がったら買ってもらえたりして、それでしばらく生活していたんです。

人生で何かを変えようとなったときに、ひとつのことを決めて集中してやると、自然といろいろなことが起こっていくわけですね。最初に、ブラッド・ピットから「家具のデザインをしたいから、作るのを手伝ってくれ」と

言われて作って、そしてポール・マッカーシーというアメリカのアーティストがいろんな変わったものを作っているんですけど、その人からも連絡が来て「これを作ってほしいから作ってくれないか」ということで、どんどん仕事が入って作っていました。やっぱり人の顔が好きなので、いつもこれをやり続けているわけです。最近ではコミッションが多くなってきたので、注文が来てから作るようになってきています。



3 か月ぐらい前にパリでアンディ・ウォーホルが展示されて、ハイパーリアリズムのグループショーでいろんな国に行っていて、今ちょうどローマに行っています。ハイパーリアリズムの歴史を展示したショーですね。これを見て、また注文が来たりして、作っていくわけです。

<2度目の映画界で見えてきたこと>

2度目の映画界で見えてきたこと



ずっとアート関係の仕事をしていたんですけど、ある日、ゲイリー・オールドマンさんからEメールが届いて、「今度、映画でウインストン・チャーチルを演じることになったから、仕事をしてくれないか。もし君ができないなら、この仕事を断るから返事をくれ」と。僕は「1週間、とりあえず待ってくれ」と言ったんです。僕自身、非常に迷ったわけです。

結局のところ、最初にリンカーンのメイクを見て「これをやりたい」と思って、実際に映画の仕事を始めたんですけど、なかなかそういう仕事がないので実現できなかった。僕自身のやりたいことというのが、「シリアスのドラマで、主人公がほかの人物になって話を作り上げていく」という映画だったんですね。それまでにやった、例えば“老人メイク”もコメディが多かったので。1週間悩んで、もしこれを断ったら絶対後悔するなと思ったので引き受けました。そこから映画の仕事が再び始まりました。

2度目の映画界で見えてきたこと



ゲイリー・オールドマン



元イギリス首相
ウィンストン・チャーチル

良かったのが、非常にいい映画だということと、ゲイリーさんが非常に才能のある役者さんなので、もちろんいい役者がいないとメイクも成り立ちませんから。この仕事を取れたということが非常に良かったですね。

2度目の映画界で見えてきたこと



持てる技術を全て注ぎ込んだ

結局、2018年にこの映画で初のアカデミー賞を受賞することになって、英国アカデミー賞(BAFTA)など、いろんな他の賞もいただいて、それでまた開けたわけです。アカデミー賞を取ると何がいかかというと、その栄誉だけではなくて、「この人はいい仕事ができる」という証明をいただくようなもの。「この人に頼んだら間違いない」というレッテルが付けられるわけですね。あとは交渉のときに、結局のところ僕の強みというのがファインアートもしているのだから、映画の仕事をしなくてもファインアートがあるから、例えば自分が必要な予

算と時間を伝えて、もし交渉しないといけないんだったら断るからというふうにしておけば、交渉しなくていいわけです。大事なところは何かと言ったら、ばく大なお金を頼むのではなくて、ただ必要なことを頼むこと。結局のところ、日本の悪いところも見てきたわけですけど、日本というのは、誰が安いかで話が進むことが多いわけです。お金もないし。でもアメリカは、プロデューサーはもちろんお金は少なくしたいんだけど、やっぱりいいものが作りたいので、“交渉ゲーム”のようなものが始まるわけですね。僕自身のメイクアップアーティストとしての責任として、いいものを作るというのはもちろんですけど、ここで安いものを作ってしまうと、どんどんみんなの値段が下がっていく。やっぱりある程度のところで押さえておかないと「こいつは安い金額で仕事ができるから」となって、全体の予算が下がっていくんですね。業界のレベルを保っておかないといけないので、予算というのはやはり大事になってきます。いい仕事をして、結果を出して、賞をもらって、それをまた続けていくということですね。



そのあとに、映画「Bombshell」という、日本題が「スキャンダル」、その仕事がありました。これは、アナウンサーのメーガン・ケリーの話で、「主演のシャーリーズをメーガン・ケリーみたいにしてくれ」という話が来て、この仕事をまた受けました。これは時間があまりなくて予算もなかったんですけど、シャーリーズがすごく才能のある役者さんで、すごくいい人なので断れなくてやりました。

2度目の映画界で見えてきたこと



シャーリーズ・セロン



当時Fox Newsキャスター
メーガン・ケリー

(上の画像を)見たら分かりますけれど、まぶたがかなり違うので、まぶたをつけて、鼻の穴の大きさが違うから、“鼻栓”のようなものを入れて、鼻の頭にアプライアンスをつけて。あごとほったの側面をちょっと四角く薄くして、あとコンタクトレンズを入れて、シャーリーズをメーガン・ケリーにしました。

2度目の映画界で見えてきたこと



2度目の映画界で見えてきたこと



これもアカデミー賞が取れたので、非常に良かったですね。1回受賞するだけだと、まぐれかなというのがあるんですけど、2回受賞すると確実にというふうに見られるので、やっぱりそれは良かったです。

2度目の映画界で見えてきたこと



次に来た仕事は、今年の頭に終わらせたんですけど、映画「Maestro」(2023 年秋 公開予定)というレナード・バーンスタインの映画です。レナード・バーンスタインは、僕自身、子どものときにNHKのドキュメンタリーを見て、非常にインスパイアされた人で、有名なアメリカの指揮者で作曲家ですね。顔も男前で、非常に特異な顔をした人です。自分でも、自分の顔にメイクをしようかなと思ったぐらいにおもしろい顔の人で、ドキュメンタリーを見たときに、その人が話していることに非常に感銘を受けて、そこでもやっぱり顔とのつな

がりを見ていたわけです。

2019年に、プロデューサーで監督、主演のブラッドリー・クーパーが記者会見をして、レナード・バーンスタインの映画を作ることになって、ほかにはマーティン・スコセッシがプロデューサーで、スティーヴン・スピルバーグもプロデューサーで映画を作ると。ブラッドリー・クーパーにいろんな方法でとりあえず連絡して、この仕事を取りたいと手紙を書いたり、僕のエージェントに調べてもらったり、でもなかなかつながらなかったんですね。なかなか何も返事がなくて、1か月して突然、ブラッドリー・クーパーから「一緒に仕事をしたい。興味があるか」というテキストが届いたんです。もちろん興味があって、やりたかった仕事でした。なぜやりたかったかと言うと、非常に顔と人物にインスパイアされた人の話で、もうひとつ大事だったのが、“人生の歩み”を見せる話だったんですね。レナード・バーンスタインが25歳のころから72歳までの話なので、年も表現しないとイケない。ブラッドリー・クーパーと会って話して、できるだけ似せたいということになりました。

当初、2020年から始める予定が、新型コロナウイルスのパンデミックが始まって一旦止まったんです。そして結局、顔型などを取ったのが、2020年の秋。その次の年、2021年に撮影する予定が、パンデミックが長く続きましたから、とりあえずテストだけしよう。テストメイクですね。アメリカのディズニーのコンサートホールというのがあって、そこでメイクを初めてして撮影しました。カメラマンが有名な監督さんで、指揮者も有名な指揮者で、それでスピルバーグがいて。僕自身「最初のテストでそれはないやろ」というふうに思っていたんですけど…というのは、最初のテストというのは絶対失敗も多くなりますね、すごいプレッシャーの中でやりました。さらに良くするために、またテストをして。結局、撮影を始めたのが去年(2022年)の5月。ニューヨークでしばらく撮影して、終わったのが11月だったんですけど、リShoot(撮り直し)で今年の4月にまた撮影しました。

非常に思い入れのある作品で、ブラッドリー・クーパーが非常に素晴らしい人で、今まで一緒に仕事をした中で一番すごい人でした。信じられなかったのが、監督と脚本とプロデューサーと主演、その全部をこなしてやっても全然気分を悪くしない人だったんですね。メイクするのも楽しかったです。

2度目の映画界で見えてきたこと



僕自身も 54 歳になって、体力的にも精神的にもなかなかダメなので、現場でも続くかどうかわからなかったんです。特にロケの現場。最初はメイクアップアーティストを雇ってメイクを頼もうと思ったんですけど、最後にテストをしたときに、ブラッドリーが「やっぱりやってくれないか？あなたにやってほしいから」ということで、そのころにはかなり仕事の関係ができていましたから断れなくて、結局、現場でメイクをしました。それが多分、今年末に公開されると思います。非常に楽しみです。今までになかった、初めて本当に映画の仕事をして良かったなと思った仕事でした。

だから今は、映画の仕事とファインアートを同時にやっています。結局、作りたいものを作っているんで、どっちかを選んでやるというより、やりたいことをやっているということで、やり続けています。

<Q&A パート②>

Q. どうやってハードルを越えて
アメリカで成功？

NHKACADEMIA



Takaeさん「トラウマの話など、いろいろとお話していただいて、対人恐怖症ということで、日本で仕事をする時も大変だったと思うんですけども、それを越えてアメリカまで行って、克服しつつ仕事できたというのは、どういうハードルを越えられたからそのような行動につながったんでしょうか」

カズ・ヒロさん「それはいい質問ですね。もちろん、好きなことをしているので、それを続けていたいというのがありました。あと、僕は家族・親戚の中で一番若かったんです。それで子ども扱いされていたので、その“意地”があったんですよね。絶対に見返してやるというのがあったのと、虐待などを受けていると、なんとかして自分を作り上げないと、どうにもならないというのがあったので。あと、やっぱりディックさんはじめ、すばらしい人に会ったことで、お返しをしないといけない。与えられたものに対して頑張ってやり遂げないといけないという気持ちもありました。いいものを作りたいというのは、いつも思っていることなので、それら全部の集まりですよ。それでやり続けられた。達成感というのもあります。いいものができた時に、説明をしなくても見た人はやっぱりわかるわけですよ。いいものと悪いものが。自分もいいものを見ることが好きで、そういうものは説明なしで自分に入ってくるものなんです。僕自身、何かを作り上げることが、生きる理由なんです。そこでしょうね。それをやめたら死んでいるのと同じだというふうになりますから、そこが大事なところですね。それが理由で、まだ続けているんだと思います」

Q. いろいろな経験で
コンプレックスは克服できた？

NHKACADEMIA



あかさん「子どものころからあまりご自分の顔が好きではなくて、写真を撮られたりするのも好きではないとおっしゃっていましたが、私も子どものころから、自分の容貌が原因でいじめられたり、悪口を言われたりしたことがあって、いまだにちょっとコンプレックスがあるんですね。カズ・ヒロさんは、いろんな役者さんやいろんな人のお顔をご覧になって、経験を積まれて、ご自身の顔について、昔より好きになったとか、写真を撮られるのが好きになったとか、心境の変化はおありですか？」

カズ・ヒロさん「あのね、今も好きではないんですけど、もうね、年を取ることのいいことというのは、表面はどうしてもよくなるんですよ(笑)。だから写真を撮って喜んでもらうこともないし…もちろん今も嫌ですけど、例えば誰かが何かのために必要で写真を撮らせてくれというのだったらいいんですけど、自分のために撮る必要はない。町なかで、セルフィーを撮っている(自撮りしている)人を見たらゾッとします(笑)」

Q. いろいろな経験で
コンプレックスは克服できた？



カズ・ヒロさん「やっぱりトラウマで自分の顔を写真に撮られるのが嫌になって…一番ひどかったのが、親に人前でけなされるわけです。それで人目が気になる。どんどん顔をカバーするようになって。子どものときの話ですけど…小学校の卒業アルバムで僕が笑っているのを母親が見て『そんな顔をしたら恥ずかしいからやめて』というふうに言われたんですよ。それが非常にショックで。それから写真を撮られるのがすごく嫌いになった。それが治ったかどうかは別として、今はそんなに意味がないので、必要なときに写真が撮ればいい。それは別に気にしてはいませんね。

さっき話したように、子どものときのトラウマ、しばらく全部自分で隠していた、自分で押さえつけていたものが、何かの拍子に出てくるわけです。それで大事に感じたのが、僕自身、アメリカ人になった理由というのが、いろんなことがあって、家族との縁を切るための決定。日本では、家族の縁は法律で切れないということがわかって、アメリカで友達に話してみたら、アメリカは切れると。それならば、アメリカ人になろうということでアメリカ人になって、名前を変えられるということで、しばらく悩んで、僕の名前がカズヒロだったので、家族の名前を切って、名前も半分切ってやるということで、カズとヒロにしたんです。名前が変わってから日本への飛行機に乗ったときに、『ヒロ様、ヒロ様』と呼ばれて、しばらく気づかなくて、ちょっとしまったなと思ったんですけどね。

トラウマは、人それぞれにいろんな程度であると思うんです。気付いたのは、自分の中にあるもの、誰かに植え付けられた自分の中に持っているものは、自分で処理しないと無くならないということです。去年両親が亡くなって、憎しみとかいらだちとかが一緒に消えてしまうかなと思ったら、それは簡単には消えないものなんです。それでいろいろと自分で考えて、処理しました」



アメリカで生活して25年以上たつので、両方の言語がぐちゃぐちゃになっていますけれど、とりあえず僕がやってほしいことは、やっぱりやりたいことを突き詰めてやっていかないとダメです。人生ね、生まれてきて存在しているということ自体が、非常に素晴らしいことですから。その中で、自分に何ができて何を残していくかというのは、僕にとっては非常に大事なことで、それを見極めてやっていただければと思います。

<これからやりたいことは？>

今54歳で、あと健康に仕事ができるのが10年かな。その中で何を残してやっていくか。あと仕事を続け過ぎて、体を壊して、残りの人生を不健康でいたくもないですし、健康な状態で生活の基盤を作って、残りの人生を楽しむということですね。もちろん何かを作り続けるとは思いますが、やっぱり映画の仕事というのは体力的にもたないので、いろいろと夢を持って考えているところです。